



# 男は 痛い !

國友万裕

第17回

龍三と七人の  
子分たち

## 1. ラーメンをもらった!

1ヶ月ほど前、仕事で一緒のある女の先生から彼女の故郷のラーメンをいただいた。3人前のやつを二箱である。とても嬉しく、感謝したのだが、さて、どうしよう???

今のマンションに移ってから、3年半が過ぎようとしているが、キッチンを使ったのは一度だけ。2年ほど前に母が遊びに来て、手料理を作ってくれた時だけだ。その時も大変だった。俺の部屋には炊飯器がない、電子レンジがない、フライパンもない、急須もない、あるのは電気ポットと、前にこの部屋に住んでいた人が残していった小さな鍋だけなのである。仕方がないから、近所のスーパーで、ご飯を買い、誰が使っていたのかわからない、その小さな鍋で、母がちょっとしたものをつくってくれた。

俺は大学で教えているので、テキストを採用すると時々出版社からお礼に食べ物が送られてくる。毎年うどんを送ってくれる出版社があるのだが、毎年他の先生にあげている。お茶をくれる出版社もあるが、これも他の先生にあげている。俺は絶対に自分では料理はしない、お茶もたてないと決めている。

もともと俺は器用に頭を切り替えられない性格である。学生の頃は想像を絶するほど部屋を汚くしていた。あの頃の俺の心はまさに嵐だったので、俺の部屋は俺の心のメタファーだった。20代の後半の頃、少しましになって、男も料理ぐらいはできなくてはと思って、毎日料理をしていたが、そのおかげでキッチンが汚くなって、出るときには敷金を返してもらえどころか10万円くらい余計にとら

れた。今だったら考えられない話だが、あの頃は住居者の方に修復義務があったのだ。しかも、自炊していた頃は、栄養が偏るので、無残なくらいに太ってもいた。

そのあと、30を過ぎてからは仕事が忙しくなり、無理に料理する必要もないのだから、特別な時以外は料理はしないと割り切った。しかし、今回のラーメンはどうしても食べたかった。せっかくだらしたのに他の人にあげるなんて、失礼だ。また地方のラーメンはそれぞれ味わいがあるので、どういう味がするのかも知りたかった。

誰かのところに持って行って食べよう！まず、日頃お世話になっている、男の先生に頼んでみた。彼は俺と違って生活能力がある。安くしてうまいものをつくるのは得意だ。すると彼の方はあまり気が進まないようだった。「カニとかよっぽどつくるのが大変なものなら、話は別だけど、ラーメンなんて、自分でつくりゃいいじゃないですか」と言われてしまった。「でも、普段火を使っていないと、火を使うのも怖いよね。火が出たらと思っちゃうから」と俺。「でも、國友さんのところって、電気コンロでしょ？ 余計に心配ないじゃないですか？」

確かに彼の言う通りだ。ラーメンも作ろうとしない俺の方が悪い。そう思って、自分でつくるしかないかと観念していたとき、行きつけのレストランの女性にそのことをふと話したら、「それだったら私が作ってあげるわよ」と引き受けてくれた。

彼女は前に、京都風の雑煮も特別に作ってくれたことがあった。彼女のレストランは小さな、家庭的なレストランなので、そういう脱線も許されるのだ。そういうわけで、近々、

彼女のところでラーメンをつくってもらって、食べる予定である。

思えば、彼女のレストランに通い始めて、もう3年が過ぎている。彼女のところに最初に行った時のことはもう覚えてもいない。学会で知り合った先生が、この女性の義弟にあたる。それで「行ってあげてください」とチラシを渡されて、それから。ところが行ってみると、彼女は、俺の行きつけの近所のカフェの人とも知り合いであることがわかり、対人援助学会のメンバーの人や映画祭のメンバーの人、大学の非常勤講師仲間だった人とも親しいことがわかっていった。「京都は狭いのよ。だからすぐに知り合いになるのよね」と彼女。

そんなわけで、俺はすっかり彼女の店の常連で、本当に美味しい料理を毎週ごちそうになっている。自然食系の家庭料理である。

## 2. そうじしなくては！

俺は部屋のそうじもほとんどしない。洗濯は毎日しているが、アイロンかけはしない。そういえば、アイロンはもっているけど一回も使ったことはない。この頃はノーアイロンのワイシャツがでていたので、ハンガーにかけておけば、それほど問題はない。

1週間に1回、マッサージの人に部屋まで来てもらって、体のメンテナンスをやっているのだが、彼は綺麗好きで、こっちが頼まなくても、さっさと部屋のそうじをしてくれる。ちなみに今俺のところにある掃除機は彼のお古なのである。

「國友さん、もうおっさんなんだから、掃除機くらいはかけないと寿命が縮みますよ」

と彼からは言われる。彼は普段が綺麗に生活しているからなのだろうが、敏感である。彼は、俺の部屋にくると必ず、最初に窓をあけて、空気を入れ替える。俺は窓を開けることすら面倒臭くて、そうそうしょっちゅうはあけていないのだ。

彼は、去年までは、もっとたくさん部屋の掃除をしてくれていた。しかし、この頃、彼の仕事が忙しくなってきたので、そうそう彼に甘えるわけにもいかない。自分でするしかないのだが、なかなか進まない。俺の部屋がゴミっぽくなるのは、仕事柄紙が多いからだ。昔の答案とかを溜め込んでいて、どこから捨てていいのかわからなくなってしまっている。この頃は個人情報にうるさい時代なので、名前などが入っている書類は捨てるのに苦労する。自分宛にきた郵便でも、露骨に捨てるのはまずいかと思って、なかなか捨てられないため、部屋が紙だらけになっていくのである。「そこまで考えなくても、そのまま捨てても誰も見ないんだから」という人も多いのだが、強迫的な性格の俺にはそれができないのだ。とりあえず、シュレッダーを買った。小さなシュレッダーなのでテストの答案まで処理するのは無理だが、自分に来た郵便くらいは、これで処理できるだろう。

ちなみに俺のマンションは、掃除会社が毎日ゴミをとりにくるので、ゴミの分別はしなくていいことになっている。しかし、それでも俺は心配になる。俺はやはり強迫症だ。普通のところだったら、燃えないもの・燃えるものと分別して、決まった日に捨てるのに、何もかも一緒に捨てるということに罪悪感を抱いて、それができないのだ。せめて、カンとペットボトルだけは、一般ゴミとはわけて

おこうと分別して捨てる。しかし、ペットボトルはラベルなどをすべてはいで捨てなければ気が済まない。他の人たちはそこまでしていない。そこまでしようとするから疲れるのだけど、俺はいったん決めたルールが破れないのだ。ルールを破ってしまうと絶望的なことが起きるという強迫観念にとらわれている。俺の生活にはルールがあり過ぎて、それが俺の行動を鈍らせている。独り身で自由のはずなのに、心は強迫症に縛られているので、自由を感じる間がないのである。

一週間に一度、マッサージの彼がきてくれるのは、俺にとっては心のやすらぎの時間だ。彼と俺は、一緒に飯や風呂、海水浴やスポッチャも行った仲だから気心が知れている。体をマッサージしてもらいながら、心もほぐれていく。彼は元々俺の通っているスポーツクラブで働いていた人で、8年くらい前から知っている。親密になってからはもう4年近くになるようとしている。もはや、家族のようなものだ。

### 3. 愚痴を聞いてくれる友人

俺は強迫症で心配性だ。当然、誰かに愚痴をこぼしたくなる。グチグチ言うだけで、俺の心は少しマシになるのだが、愚痴を聞かされる周りの人は、当然のことながら、面倒臭がる。しかし、一人だけ、嫌がりもせず、愚痴を毎日聞いてくれる人がいる。6歳年下の男性だ。彼と知り合ったのは、14年ほど前、俺が37歳の時のことだった。

なんども書いてきたとおり、俺はずっと若い頃から男の友達の一人もいなくて孤独だった。他の男子と同化できないことで不登校に

なり、学歴マイノリティになったことで、さらに友達はつくれなくなり、30になって、カウンセラーにそのことを相談しても、解決策は見つからない。ある女性カウンセラーからは、「そんなみんな親友なんているのかしら？みな、その場その場でつきあっているんですよ」と言われた。

もう友達をつくることなんか諦めていた頃に、神様がくれた友達。それが彼だった。俺の唯一のLINE友達でもある。彼と俺は、まさに赤い糸で結ばれた友達だった。彼は実家は関西だが、普段関西で暮らしているわけでもないのに、知り合った当初からメールのやりとりで、徐々に友情を育んでいった。俺は、それまで友達もいなかった身なので、友情に多くを期待することはしないでおこうと思っていた。心からの友達なんてそうそうできるものではないし、人は皆、やってきては去っていく。さよならだけが人生なのだ。

しかし、彼とはそうはならなかった。この14年間、お互いに風呂好きで、美味しいもの好きなので、大阪のスパワールドで落ち合っ、たっぷり風呂のなかで話をし、一緒に食事をする。酒を飲んだりはしない。むしろ、しゃれたレストランと甘いデザートだ。彼は俺の愚痴をたっぷり聞いてくれる。他にも映画の話、コンピューターの話、仕事の話など、とりとめもなく楽しい会話が続く。女性の話になることはない。俺と彼はゲイ関係ではないが、これだけしょっちゅう風呂にいつて、一緒にスイーツを食べて、しかも、酒や女の子の話なしとなったら、端から見たらゲイだろう。しかし、本当にゲイ関係ではないのである。

彼とつきあっていると、同性同士の友情結

婚というのがあってもいいのかと思えてくる。この頃、男同士の結婚も認める国が増えてきて、日本も近いうちに認められるのではないかと思うのだが、別にセックスだけが結婚じゃない。むしろ、一旦結婚してしまうと性欲を感じなくなって、セックスレスになっていくカップルの方が多いとも言われる。中村うさぎのようにゲイの男と結婚している女性だっている。

彼と俺は、14年も友情をつないできた。本当に赤い糸の関係だ。ゲイ関係ではなくても、生涯の伴侶とするにふさわしい相棒なのではないか。

#### 4. 俺は足長おじさん

俺の従妹はシングルマザーである。男の子が一人いる。まだ幼児だった頃は本当にかわいくて、彼と一緒に遊ぶと心が癒されていたものだ。息子ができたみたいで嬉しかった。しかし、その彼も、早くも小学校の高学年となって、だいぶ大人びてきたせいで、この頃は恥ずかしがって、あまり相手になってくれなくなった。

しかし、たまには親父の気分を味合おうと去年の夏の彼の誕生日にはゲームソフトをいくつか買ってあげた。しかし、今年の夏は残念ながら会う機会がないので、彼が欲しがっているゲームの機械をAmazonで注文して、彼宛に贈った。2万円くらいかかった。ちょっとした散財である。

でも、いいか。お父さんのいない子だし、たまには足長おじさんみたいな気分で、プレゼントを送るのも悪くない。父のない子と子のないおじさんである。彼は俺のプレゼン

トに本当に喜んで、夢中でゲームばかりしていると電話で聞いた。あー、よかった。ゆくゆくは彼が京都に遊びにきてくれればいいけどなあと思っている。まだ小学生だから無理だろうけど、高校生くらいになれば可能かもしれない。夏休みに1週間くらいきてくれれば、京都案内もできるだろう。

実際に自分の子供をつくることは俺にはできない。俺は、少年時代に辛酸を舐めるような思いをしているので、自分の血を残したくない。あんな辛い思いをするのは俺一人で十分なのだ。

## 5. Facebook

先日、N先生と打ち合わせのために温泉に行った時のことだ。ある若い男性が、立って俺の方を見ている。4年ほど前に専門学校で教えていた子だった。「あー、元気だった？」とまず男同士の固い握手。「だいぶ、ムキムキになってきただろう？ スポーツクラブで筋トレしているんだよ」と俺が自分の体を誇示すると、彼は俺の腹や胸や腕をさわりながら、「まだまだですよ（笑）」。彼はスポーツマンなので、なかなか手厳しい。「また今度、飯でも行こうよ」「ええ、ぜひ」「後で、Facebookにリクエスト送るから。先日、Aさんから友達リクエストがきて、それがきっかけで、Sくんには久々にあったんだ」と会話した。

その後、風呂から上がって早速リクエストを送るとすぐに承認が来た。「機会があれば、また一緒に風呂に行こうね」とメッセージでやりとりした。

専門学校で教えていた頃は、つらいことも多かった。専門学校は大学と違って、学生の

注文が多いので、クレームが来て凹むことも度々だった。その一方で、専門学校の子は卒業した後も、俺と交流しようとしてくれる。大学の教え子でも数人、Facebookで繋がっている子はあるが、専門学校の方がはるかに割合が高いのである。

これだけ何人もいると、時々、遊んでもらうことがある。かつての教え子に遊んでもらう先生なんて、なんとなく情けない気もするが、しかし、若い頃友人のいなかった俺にはそれが楽しくてたまらないのだ。

## 6. しかし、女性恐怖は治らない

俺の生活は優しさに満ちている。独身生活になんの不自由もしていない。

繕い物があるときはクリーニング屋さんに頼めばやってくれる。留守中に荷物が届く場合は、近くのコンビニで受け取れる。コンビニには毎日なんども行っているのだから、すっかりお得意さんで、俺には笑顔で接してくれる。行きつけのレストランはたくさんあって、俺が、漬物嫌いで、スイーツが好きだということは、もう周知のこととなった。

強迫症も耐えられないほどではない。人間は自分の生活と付き合うしかない。50代にもなれば付き合い方もわかってくる。

少しずつ、自分の場はできてきたように思うのだが、女性と恋愛関係になることだけはできない。友人ならOKだが、深い付き合いはしたくない。俺のジェンダーの病は、本当に深刻なものだ。しかし、それもだいぶ割り切れるようになってきた。結婚しても、恋愛しても不幸な人は大勢いる。俺のように女性と付き合うことがなくても、他のやさしさに

包まれているやつのほうがはるかに自由で幸せだ。

俺は対人援助学会で、少年の頃に異性から凌辱されると、それが一生消えないトラウマになり得ること、そして、女の子が男に凌辱されるのは重大な問題としてケアして貰えるけれど、逆の場合は、軽いことのように片付けられてしまうのだということ、それを訴えたかった。

俺は、男性ジェンダーを女性に要求してこられることに激しい反発を感じる性格になってしまったため、もはや女性とは軽い関係しか結べなくなってしまったのだ。男性ジェンダーを求めずに男と付き合う女なんて、世の中に存在するのだろうか。フェミニストであっても、男に守ってもらいたい願望を持っている人のほうが多いのではないか。

俺は女性の前だと男になれない。自分のことを「俺」とは言えない。男っぽいことができない。男の子の前で男っぽいことをするのは平気になってきたが、女性だと様々なトラウマが一気に想起されて、それがブレーキになってしまう。

俺は女に男という目で見られるのが嫌なのだ。それは、俺が少年の頃に、男であるがゆえに様々なつらいことを強制され、さらに、その強制してきた相手が女性であるケースが多かったこと、そして、男が男のジェンダーを強制されて苦しんでいるのを、まだまだ気づかずに、女性のほうが一方的にジェンダーで苦しんでいると思い込んでいる人が多いことが原因である。

女性に凌辱されたトラウマを引きずっている男なんて、マイノリティなのだろう。毎年発表し続けたおかげで、対人援助学会で徐々

に賛同してくれる人はでてきた。しかし、まだまだ分からない人の方が多い現実を目の当たりにすると、自分の孤独を思い知ることがたびたびである。

理解してもらえないままに、俺はもうすぐ52歳。人生の秋になってしまった。女性から受けた凌辱をどう消化するのか。これは俺の人生の一生の宿題なのだろう。1日1日、自分の宿題と闘いながらも、楽しい感動を沢山積み重ねて、これからの人生を送ることができたらと思う。

## 6. 『龍三と七人の子分たち』(北野武監督・2015)

今回のオススメ映画はこれである。何よりも藤竜也の主演というのが嬉しい。藤竜也は若い頃は見事なマッチョで、日本の役者のなかでも、その体躯のよさはナンバーワンだった。しかし、その彼も74歳となって、この映画でも少しだけ裸の場面があるのだが、さすがにもう昔ほどのムキムキではない。だんだんと枯れてきている。

俺も、50代になって、少しずつ枯れていかななくてはならない。そんなことを考えさせてくれた。近藤正臣など、元マッチョのおじいちゃん俳優大挙出演の映画である。

マッチョの老後?????(笑)。この年になって、マッチョだと痛々しいけど、それも男のこだわりで素敵だと俺は思っている。俺も、できる限りマッチョボディを保って、70になっても、若い男の子と海水浴に行ける男でいたい、男でイタイ、男で痛い!